

須藤松雄著



志賀直哉

—その自然の展開—

明治書院

須 藤 松 雄 (すどう まつお)

明治41年 東京に生まれる。

昭和5年 京城帝国大学法文学部卒業(国文学専攻)。

現 在 清泉女子大学名誉教授。

主要著書 「志賀直哉の文学」(増訂版) 桜楓社

「志賀直哉」(近代文学鑑賞講座) 角川書店

「志賀直哉」(近代文学資料) 桜楓社

「近代詩歌の自然」 教育出版センター

「梶井基次郎研究」(改訂版・国文学研究叢書) 明治書院

「志賀直哉研究」(国文学研究叢書) 明治書院

「日本文学の自然」 笠間書院

「立原道造の自然」(国文学研究叢書) 明治書院

「志賀直哉の自然」(国文学研究叢書) 明治書院

「芭蕉の自然」(国文学研究叢書) 明治書院

現 住 所 〒238 横須賀市上町4-11

電話 0468-22-6472

志 賀 直 哉

—その自然の展開—

定 価 6,200円

昭和60年3月15日 印刷

昭和60年3月20日 発行



著 者 須 藤 松 雄

発行者 株式会社 明 治 書 院

代表者 三樹 彰

印刷者 奥村印刷株式会社

代表者 奥村正雄

発行所 株式会社 明 治 書 院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号101

電話(03)292-3741(代) 振替口座東京3-4991

はしがり

昭和三十八年、「志賀直哉の文学」（桜楓社）を出し、日本文学の特質に照らして志賀直哉の文学の自然を考察することを試みた。その後この作者によって書かれた新資料が統続と刊行されるという幸運にわれわれはめぐり合った。「志賀直哉の文学」の別章、「志賀直哉研究」（明治書院）、「志賀直哉の自然」（同）などの拙著は、それらの新資料を、志賀文学の自然の考察の上に生かそうとする試みであった。

その間、二十年の歳月が流れた。文学考察の道を照らし出して下さった高木市之助先生・麻生磯次先生は世を去られ、わたくしの仕事を見守ってくれた母も逝った。わたくし自身が七十七歳になった今、できるだけ精密に、そして自由に、志賀直哉の文学における自然の展開を見定めておきたいという心がしきりに動く。本書は、その結果である。この二十年ほどの間に、志賀直哉研究は、飛躍的に進展している。拙著に対し、大方の叱正の下されんことを切望する。

昭和五十九年九月

須藤松雄

〔付記〕 志賀直哉の文の引用は、大判の「志賀直哉全集」（岩波書店）による。ただし漢字は新字体に改め、振り仮名は、省略したもの、新たに施したものがある。

目 次

はしがき

一

I 部 麻布の文学

一章 萌芽期の自然体験

六

二章 萌芽期の文学

二六

三章 明治四十一年（26歳）の文学

四六

四章 明治四十二年から四十四年までの文学

七〇

五章 明治四十五年・大正元年（30歳）の文学

九一

II 部 尾道・城崎・松江・大山・赤城の文学

一章 尾道・城崎の文学（大正二年31歳）

一三六

二章 松江・大山の文学（大正三年32歳）

一六三

三章 赤城の文学（大正四年33歳）

一九九

Ⅲ部 我孫子・京都・奈良・淀橋・世田谷の文学

- 一章 我孫子の文学（大正五年34歳～大正十一年40歳）……………三二
- 二章 京都の文学（大正十二年41歳～大正十三年42歳）……………二八六
- 三章 奈良の文学（大正十四年43歳～昭和十二年55歳）……………三〇一
- 四章 淀橋・世田谷の文学（昭和十三年56歳～昭和二十二年65歳）……………三三八

Ⅳ部 熱海・渋谷の文学

- 一章 熱海の文学（昭和二十三年66歳～昭和二十九年72歳）……………三七四
- 二章 渋谷の文学（昭和三十年73歳～昭和四十三年86歳）……………三九八
- 追記……………四三五

あとがき

四三三

索引

四四六

I 部

麻布の文学

一章 萌芽期の自然体験

志賀文学の萌芽期

明治四十一年（一九〇八、二十六歳―数え年。以下同じ―）一月十四日、日記にいわゆる「非小説 祖母」を書いた。十年後の大正七年（三十六歳）三月、「或る朝」という題で発表した作品であるが、志賀文学らしい姿を示した画期的な作と見られていることが多い。

同じ明治四十一年の八月十四日に、「小説 網走まで」、九月五日に、「小説 速夫の妹」、十月三十一日に、「小説 離縁」（のち「孤兒」と改題）、十二月に、「荒絹」を書いた。

「祖母」（「或る朝」）をはじめとするこれら一群の作の出現は、この年、志賀文学の姿が格段と整えられたことを示すものであろう。

この年にはなお、「苔の床」「電信柱」「ブラックマライヤ」「山の水車」「ダイナマイト」「鯖壳木四郎」「富次の妻」「軽便鉄道」などの小説的作品のほか、感想文、その他の雑文が残されており、まず、この明治四十一年、質量ともに志賀文学は開始され、それ以前は、萌芽期と見ることができであろう。

志賀文学の萌芽期において、この作者は、重要な自然体験をいくつか体験した。それらは、のちの志賀文学の自然

に深く影響しているので、志賀文学における自然の研究は、まず、それら萌芽期の自然体験から理解してかかる必要があらう。

男鹿半島の月の自然体験

第一に、男鹿半島の月の自然体験である。明治三十三年、十八歳のことであったようだが、当時の表現は残っていない。はるか後年の筆に成る次の諸資料に伝えられているだけである。

①「黒木三三君と」

——忘れ得ぬ夏の旅——（全集第七巻）

大正十一年（四十歳）七月発表。冒頭の文によれば、この自然体験は、「二十五、六年前の夏で、十四、五である。」ということになる。

②「山莊雑話」（全集第七巻）のうちの「月見」の章。末尾の記入によれば、昭和二十四年（六十七歳）十二月の執筆。文中、「今から五十年程前の夏」とあるのによれば、十七歳ごろの自然体験ということになる。

③「随想三夜」（全集第八巻）のうち「私の『奥の細道』」。昭和三十三年（七十六歳）十一月、日本放送からの放送。①②と同じときの旅を語っているのだが、男鹿半島の月の自然体験には言及していない。

④⑤によれば、この自然体験は、それぞれ、十四、五歳、十七歳ごろのことになるが、③は、徳富蘆花の「不如帰」が出版された年だったという記憶から、明治三十三年のこととしており、それによれば十八歳のことになる。まず、これに従うべきであらうか。

②は、男鹿半島の月の自然体験を次のように記述している。

「今から五十年程前の夏、黒木三次といふ親しい友達と未だ汽車のない『奥の細道』の旅をして、男鹿半島のつ根にあたる何とかいふ海岸で観た月は私の生涯での最も美しい月で、今もよく憶ひ出す。晴れた夜の満月か十六夜であつた。私達は五六間海に突きでた棧橋のとつさに腰を下ろした。遙か海の彼方に両方へ裾を引いた鳥海山があり、その上に大きな橙色の月が懸つてゐた。間は広い海で、遠くの方から、二人の足元まで金色の波が動き、それを渡つて、涼しい風が吹いた。」（右の文中の「何とかいふ海岸」は、①の「黒木三次君と」によれば、「男鹿半島の入口の船川とかいふ所」である。）

右に引用した文を記しているのは、熱海時代（昭和二十三年、六十六歳、昭和三十年、七十三歳）の作者である。熱海時代の志賀文学の自然については、本書Ⅳ部一章に詳述するが、それは、根源的、恵福的な自然との調和を基調とするものである。

同じく熱海時代の筆に成る随想「閑人妄語」（昭和二十五年、六十八歳）に、次の一節がある。

「……私はそれに堪へ兼ね、東洋の古美術に親しむ事、自然に親しむ事、動植物に接近し親しむ事などで、少しづつそれを調整して行くうち、いつか、前の考へから離れ、段々にその丁度反対の所に到達し、漸く心の落ちつきを得る事が出来た。以来三十何年、その考へは殆ど變らずに続いてゐる。」

これは、旧著（「志賀直哉の文学」「志賀直哉の自然」など）の用語によれば、対立的自然関連に基づく激動から調和的自然関連に基づく平穩への転換（ほぼ、大正元年、三十歳から大正六年、三十五歳にかけて、この転換は成就した）の回想なのであるが、熱海時代の作者が、「以来三十何年、その考へは殆ど變らずに続いてゐる。」と記したのは、熱海時代が、引き続き調和的自然関連を基調とするものであることを、自ら語つたわけである。

その熱海時代の作者が、男鹿半島の月を「私の生涯での最も美しい月で、今もよく憶ひ出す。」と記したのだから、

男鹿半島の月の自然体験もまた、調和的自然関連（詳しく言えば、根源的、恵福的な自然への調和的関連）を基調とするものとして感じているわけであろう。というよりも、十八歳というような早い時期における、この種の自然体験の源頭として、いかにも懐かしそうに回顧する感じが流れている。右の文に「今もよく憶ひ出す。」とあったが、もっと端的に、熱海の山荘からの月夜の眺望と重ね合わせるようにして、男鹿半島の月の景を思い出しているようである。

「今ある相模湾に望んだ山荘からの月夜の眺めも稍これに似て、鳥海山の代りに大島が見えてゐるが、三原山の姿は鳥海山には及ばない。」（「山荘雑話」のうち「月見」）

前に引用した男鹿半島の月の景は、単純で広大である。はるかな歳月が、雑多な細部を消したから、このように単純、広大な景として蒸留されたということもあるかもしれない。しかしわたくしは、むしろ、十八歳の少年の目と心に映じた男鹿半島の月の景が、そもそもこのように単純で広大だったのであらうと想像する。

単純で広大ではあるが、空疎の感が無く、存在感が確かで、生動している。そして棧橋も、鳥海山も、橙色の月も、遠くの方から足もとまで金色の波が動いている海も、まことにまざまざと見え、それでいて何か幻視的な光を帯びている。この景には憧憬の情が漂っている。どうやらそれは、根源的、恵福的な自然への憧憬と重なって、数年前に死別した生母への憧憬が籠められているように感じられる。

山荘から眺める熱海の月夜の景に、男鹿半島の月の景を重ね合わせて考えている老年の作者については前に述べたが、「山荘雑話」の「月見」の章に描かれた月夜の鳥海山には、かの伯耆大山の影が微かに重ね合わされていないであらうか。

作者は、三十数年前の大正三年（三十二歳）、大山の自然体験を体験し、十三年前の昭和十二年（五十五歳）、「暗夜行路」終結部に大山の自然体験を表現した。大山の自然体験は、調和的自然関連を基調とするものとして代表的なも

のであり、この作者の心に深く刻まれているはずの自然体験である。この種の自然体験の源頭というべき男鹿半島の月の景を熱海時代の作者が描いた場合、その景中の鳥海山が、大山と重なり合うような感じを微かに帯びていることも、ありそうなことに思われる。「暗夜行路」後篇、第四の十二で、謙作は、「線の立派な大山」を遠望している。「遙か海の彼方に両方へ裾を引いた鳥海山」〔山莊雜話〕のうち「月見」と、重ね合わされるにふさわしい山容であろう。

鹿野山の自然体験

鹿野山の自然体験は、「旅」と題する一文に記されているだけである（全集第七巻）。大正十二年（四十一歳）七月発表。

「子供の頃は景色の面白味はあまり解らない方だった。絵でも風景画より人物画、小説なら自然描写は飛ばして読む方だった。

所が或る時、不図景色を非常に美しく感じた事がある。それは上総の鹿野山で宿屋の側の空地に寝転んで居たが、春の如何にも長閑な昼で、何と云ふ事なし、そこから遠近の風物を無暗と美しく感じ出した。勿論その以前にもいい景色の所へ来ればいい景色だと思ふのだが、それとこの場合とは全く別だった。鹿野山は五六年続けて行つて居た所で、景色も大して珍らしい所ではないのだが、其時不思議にその景色を非常に美しく感じ、感動させられた。此時から自分の景色を見る眼が幾らか開けて来たやうに思ふ。ものが解り出す時にはよくかう云ふ事がある。」

右の鹿野山の自然体験は、いつごろのことであろうか。「旅」は、右の引用に続け、「其後二年程して」と断つて、劔山の曙光の自然体験を記している。劔山の自然体験は、「早春の旅」（全集第四巻）にも記されている。「早春の旅」は、昭和十六年（五十九歳）一月、二月、四月に発表。劔山の曙光の自然体験は、「その三」に記され、四月に発表されたが、執筆は、昭和十五年であろう。そこに「三十六年前の事だ。」と記してあるのだから、劔山の曙光の自然体

験は、明治三十七年（二十二歳）ということになり、それからまた二年ほど先立つ鹿野山の自然体験は、明治三十五年（二十歳）ごろということになる。男鹿半島の月の自然体験を十八歳ごろとすれば、それから二年ほど後である。

明治三十七年の日記が全集に収められたが、秋の劔山の曙光の自然体験は、記されていない。鹿野山の自然体験が体験されたと思われる明治三十五年（二十歳）も、日記、書簡が残っていないが、翌翌年の三十七年にも鹿野山に行っているし（七月二十六日の日記）、同地は、「五六年続けて行つて居た所」（「旅」）でもあり、明治三十五年（二十歳）の春も行つたものと思われ、「旅」に記された自然体験は、そのときのことと考えていいであろう。

鹿野山の自然体験は、どのようなものであろうか。

「子供の頃は景色の面白味はあまり解らない方だつた。」「いい景色の所へ来ればいい景色だと思ふのだが」というように、鹿野山の自然体験以前の自分の状態を語る。しかしこの言い方には、大きな見落としがあるように思われる。二年ほど前、たぶん十八歳の夏、男鹿半島の月の自然体験を、すでに体験しているからである。「私の生涯での最も美しい月で、今もよく憶ひ出す。」（「山莊雑話」のうち「月見」というほどの自然体験を体験しているのに、そのことに全く言及していないからである。

しかし「子供の頃は景色の面白味はあまり解らない方だつた。」と記し、鹿野山の自然体験について、「此時から自分の景色を見る眼が幾らか開けて来たやうに思ふ。」（「旅」）と記しているのも理由あることであつて、男鹿半島の月の自然体験に言及しないからといって、これを簡単に見落としとも言えないように思われる。

男鹿半島の月の自然体験は、「船川とかいふ」僻地^{へみち}の栈橋の「とつさき」に腰を下ろした少年の目と心とに格別美しい景観が飛び込んで成立したものである。根源的、恵福的な自然との調和において、美しく統一的な景を見るといふ点で、次に述べる鹿野山の自然体験と同一構造のものであつた。ただ、このような関連において景を見る眼の開け

たことを、この少年は、あまり意識しなかった。そこが鹿野山の自然体験と異なるところであらう。それに対して、鹿野山の自然体験の方は、右のような開眼を意識したようである。鹿野山が何度となく遊びに行った所であって、わが家の庭のようになじみの深い土地だったこと、「景色も大して珍らしい所」ではなかったことが、かえって幸いだったように思われる。

自然関連の成立、景の美を見る目の開眼というような精神的な事態が、まことにまざまざと肉体的実感として語られているところがいかにもこの作者らしい。

「何と云ふ事なし、そこら遠近の風物を無暗と美しく感じ出した。」「其時不思議にその景色を非常に美しく感じ、感動させられた。」

男鹿半島の月の自然体験と違って、意識的開眼と言うべきものであった鹿野山の自然体験を特に「此時から自分の景色を見る眼が幾らか開けて来たやうに思ふ。」と記したのは、やはり理由あることに思われる。

それだけに惜しまれるのは、「遠近の風物を無暗と美しく感じ出した。」という景の表現が残されていないことである。明治三十九年四月二日付け、川村弘あて書簡の鹿野山の景などから想見するより仕方ないであらう。

「小生、一昨日此所へ来ました、鶯の声は絶へず、音といふものは鳥の声計り、人の作る音としては何にもない。昨今の入日は富士に候、トロケさうな奴が山腹へ懸ると、一ハケでやつたやうな一文字の雲が濁つた空に紅の帯となる、鳥が啼きながら、セワシク、社の森へ帰つて来る、日はとう／＼富士の後へはいる、同時に山の形が明らかに、観音崎の灯がチラツク、此景色を独り眺めては、早く君が来ればいゝのにと思つてゐる。」

剱山の曙光の自然体験

志賀文学の萌芽期の重要な自然体験として、第一に男鹿半島の月の自然体験、第二に鹿野山の自然体験を考察した

のであるが、第三に、劔山の曙光の自然体験について述べなければならない。

劔山の曙光の自然体験は、「早春の旅」によれば、明治三十七年、二十二歳の秋のことらしい。すでに大正十二年、四十一歳の七月、「旅」という文にこの自然体験を描いていたのに、それから十八年ののち、昭和十六年、五十九歳の作、「早春の旅」に再び詳述しているほど、忘れがたい自然体験なのであった。

明治三十七年の自然体験そのものから、それぞれ十八年、三十六年を経て記した右の二文献の叙述を見ると、ともに印象鮮麗であって、印象の核心が、互いに一致している。

「旅」は、鹿野山の自然体験に続けて、劔山の自然体験を次のように描いている。

「其後二年程して、或る秋、^{ひとりたび}独旅で、直江津^{なほえつ}から伏木^{ふしぎ}まで、汽車のない頃で、夜の汽船に乗った事がある。宵の^う中^{ちゆう}烈^{はげ}しい雨で、十時頃それが^{きれ}綺麗に晴れ、非常にいい月夜になった。空気が澄み切つて居る。私はその^た為^{ため}後で風邪を^ひ惹いたが、夜つびで甲板で過^{しま}してつた。そして其明け方、円い大きな月が真黒な能登半島^{のど}の上へ沈みかけると、既に薄く雪を頂いた劔山^{うしろ}の後から非常に美しい曙光が昇つて来た。此時の景色は私には忘れられない。少時^{しばらく}すると峰々が火の色に縁取られる。月の方は青白い光を残し、水平線に延びた半島^{むか}の向ふへ沈んで行く。一方は金、一方は銀だ。空も海も一緒にさうなつて居る。その真中に自分が立つてゐる。何方^{どこ}も実に美しい。実に雄大な感じを受けた。」

自然体験そのものを去ること十八年であるのに、昇る曙光と沈み行く月とを中心とし、空、山、海にわたる明け行く大景の変化を描いて壮麗をきわめ、簡潔な描写であるが個個の物がたいへんはつきり見える。「旅」に劔山の曙光の自然体験を描いてから十四年の後、昭和十二年、五十五歳の作者は、「暗夜行路」後篇終結部（第四の十九）に、大山の夜明けの大景を描いた。大正三年、三十二歳の大山の夜明けの自然体験を去ること二十三年であって、その点を懸念した作者は、意外に描写が成功したことを喜んでいる（日記、書簡など）。しかしこの成功には、十四年前の大正十

二年、「旅」という一文において、執筆時より十八年前の劔山の曙光の自然体験を描いて成功したことが、見えない力となって働いているように思われる。「旅」が、大正十二年七月の「婦人之友」に載せられた短文にすぎず、劔山の曙光の自然描写が、そのまた一部分であるところから、それほど重く見られていないようであるが、「暗夜行路」後篇終結部の大山の夜明けの大景の成功を助けた先駆的な文として注意されるべきものであろう。

大山の夜明けの大景（「暗夜行路」後篇終結部）は、劔山の曙光の大景（「旅」「早春の旅」）に非常に似通っている。空、山、海にわたって急激に変化する暁の大景そのものが、大山と劔山とで似通っていたのだと言えば、それまでだが、劔山を造型した創作体験が、十四年後の大山の造型に影響していないであらうか。「旅」は、劔山の曙光を「……、円い大きな月が真黒な能登半島の上へ沈みかけると、既に薄く雪を頂いた劔山の後から非常に美しい曙光が昇つて来た。」というように描いたが、「暗夜行路」も、大山の曙光を「明方の風物の変化は非常に早かつた。少時して、彼が振返つて見た時には山頂の彼方から湧上るやうに橙色の曙光が昇つて来た。」というように描いている描写など、特にそのように思われる。

「暗夜行路」終結部に大山の夜明けの大景を描いてから四年後の昭和十六年、「早春の旅」（三）に、再び劔山の曙光を描いた。「劔山の後から湧き上る曙光は恰も金粉を吹き出すやうで、後年、伝源信作『山越彌陀』を見て、其時の曙光を憶ひ出し、感心もしたが、未だ物足らぬ氣もした程であつた。月は能登半島の上へ落ちて行き、その空は銀色に澄んで暗く、東の空は金色から段々明るくなつて行つた。」

劔山の曙光の自然体験から三十六年後の表現である。前に述べたように、その体験から十八年後、「旅」に劔山の曙光を描き、おそらくその影響の下に、「暗夜行路」終結部に大山の曙光を描き、今また「早春の旅」に劔山の曙光を描いた。「金粉を吹き出すやう」という比喻を新たに伴って、曙光の描写が強化されたようにさえ見える。

このように劔山の曙光体験は、終生この作者の創作主体に生動し、その表現が繰り返された。広く知られている